

.....

## 英語教育への提言

### 学生を生かす指導の工夫

小野田 榮 (神田外語大学)

大学の教師になってから10年以上になるが、この間学生は、学習意欲と英語力に関して多様化してきているように感じられ、ますます教師の指導力が求められるようになってきていると思われる。

しかし、このような状況を迎えているとは言え、効果的な授業の指導のポイントは以前と大きく変わることはないと考える。人間の行動に大きな影響を与えるものとして、心理学者 Edward Deci と Richard Ryan が Self-Determination Theory の中で主張した、人間が生来求める3つの心理的欲求、relatedness, competence そして autonomy が、英語教育の指導の上でもポイントになるように思える。すなわち、人間関係を含めたクラスの雰囲気の良いものにし、学習効果を高め、学生の知的関心のある教材やタスクを用いて満足度を高めることが大切な指導技術であると言えるのではないだろうか。

この考えをさらに押し進めれば、理想的な授業は、「学習の環境づくりと学習方法の指導は教師が行いながらも、基本的には学生が自分の考えを生かしながら授業に貢献することを通して、学習に積極的に取り組むことができる授業」ということになると思える。「授業に貢献」というと大きな響きがあるかもしれないが、実際学生はいろいろな形で授業に貢献できる。たとえば、教師は学生から質問を受けることで、学生の理解度や疑問点がわかり、授業の改善につながる。また学生にテキストの内容に関する情報を提供してもらったり考えを述べてもらうことで、他の学生の内容理解が深まり学習効果をもたらすことができる。さらに学生が積極的に活動に取り組んでくれば、教師にとって授業運営の大きな助けとなるのである。

しかし、このような理想的な授業を行うには、それなりの指導の工夫が必要である。

まず、学生にとって実際に役立つ重要なものであると感じられる教材やタスクを提供することである。使用する教材やタスクの目的や効果が明確であれば、学生の学習意欲は高まり、学習活動に積極性に取り組む傾向が高くなる。

また学生との人間関係や信頼関係の構築も重要なポイントである。教師はややもすると英語力が低い学生を学習に関して怠惰であると否定的に見なしがちであるが、彼らを大人とみなし、彼らの知的好奇心を満たすよう心掛けることが大切である。

これらの点を満たすには、学期ごとのアンケートや個人面談、クラスの学生との話し合い、presentation を行うグループの教室外での指導、e-mail による個別指導などが効果的である。

それに加え、学生に自信や達成感を持たせることが効果を発揮する。その点では、Albert Bandura の述べる self-efficacy を高める4つの要素：(1)成功した学習体験を積み重ねること、(2)言葉による説得を行ったり、学習の結果に関して褒めるなどの positive feedback を行うこと、(3)他の学習者が成功する姿を見せること、そして、(4)不安を感じさせる要素を減らす、という指導技術が考えられる。またそれに加えて、到達可能な学習目標を設定させたり、学習や学生生活に肯定的な見方を育てることなどが大切になるであろう。

さらに、自信を高めることと関連して、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢をはぐむことが大切である。学生の自主性を高めるため、興味ある学習内容や題材、タスクを選ばせ、学生同士が自然な形で意見を述べ合い、学びあえるように導きたいものである。

そして最後に最も大切なことであるが、学生に自分の学習に対して責任を負う姿勢を育むことである。家庭学習の習慣化と self-access learning center などで学習に率先して取り組む姿勢を育てる必要がある。

以上述べた点は指導のポイントのごく一部に過ぎず、教師であればみな当然考えている点であろうが、多様化してきている学生の指導に取り組む昨今において、もう一度見直しておくべきことのように思える。

## LET関東支部第122回(2009年度) 研究会報告

小原 平(東京慈恵会医科大学)

関東支部の第122回研究会は、6月13日に拓殖大学の文京キャンパスで行われました。拓殖大学での開催は2回目で、今回の大会テーマは、「インプットからアウトプットにつなげる指導」。特に、シャドーイング、音読トレーニングに焦点を当てた企画となりました。午前中は、研究発表・実践報告のために時間が取られ、3つの部屋に分かれて、それぞれ2本ずつの発表が行われました。内容は、西武文理大学の鈴木政浩先生の「個人サーバを活用した学内 e-learning システムの構築」といったテクノロジーをテーマにしたものから、東京国際大学の山口豊先生をはじめ、4名の先生方による共同発表「コンテンツ・シャドウイングと英語熟達度の関係」といった大会テーマに沿ったもの、さらには皆川晶子先生の「高齢英語学習者のための授業設計」といった時代を反映した内容のもの、そして日本大学の宇佐美昇三先生の「ベトナムにおけるメディアと英語教育の現状」といった非常にユニークな内容のものまで盛りだくさんで、あらためてこの学会の奥行きを感じました。その後11時から関西学院大学の門田修平先生による講演「インプットからアウトプットにつなげる指導：シャドーイングと音読の効果」が行われました。門田先生は以前からシャドーイングに関する研究を続けておられ、今回の講演では、実際の授業の中でのシャドーイングを利用した様々な訓練の可能性について示唆に富んだ話をなさいました。



お昼をはさんで、総会が行われ、拓殖大学の外国語学部長の山田政通先生と、LET 関東支部長の見上晃先生が挨拶。その後同じ会場で、大会テーマに基づいたシンポジウムが行われました。大東文化大学の田中深雪先生、東京学芸大学付属世田谷中学校の淡路佳昌先生、暁星小学校の久埜百合先生をパネリストに迎え、それぞれの立場から、小学校、中学校、そして大学における指導実践例とその利点、問題点等について発表していただきました。それぞれの発表は、ご自身の経験を踏まえた詳細な実践報告にもなっていて、しかも、小、中、大と内容がうまくリンクしていて、聞いていて非常に有益な発表だったと思います。そのあと指定討論者の門田修平先生からの質問とコメント、フロアからの質疑応答が活発に行われ、全体で3時間15分と言う長時間にも拘わらず、少しも長いと感じさせないパネルディスカッションだったと思います。



閉会の挨拶に続いて、会場となった校舎の7階のラウンジで懇親会が行われました。ケータリングによるパーティーでしたが、まだ食べ物が届いていないというハプニングにも拘わらず、参加者が総出で準備をして、愉快的ひと時を過ごすことができました。最後に、今回利用させていただいた拓殖大学のC館という校舎は新築で、光の良く入る明るい廊下と、設備のよく整った教室での支部大会は、大変気持ちのよいものでした。

**英語教師は配られたカードで勝負する**

～ 限られた環境下で最大の効果を目指して ～

豊嶋 正貴 (大妻嵐山中学校高等学校)

■はじめに

CALL 教室や電子黒板などの最新の教具があれば授業にバリエーションを持たせることができるのと思うことが多々ある。しかし、既存のコンピュータ教室に CALL システムを組み込むだけでも 800 万円以上するわけであるから新規事業計画を立て申請しても簡単には実現しない、これが現実であろう。

しかし、私たち教師は生徒たちのために、今利用できる環境下で授業を行い最大の効果をあげることが求められている。ここでは、誰もが簡単に入手でき授業に活かすことができる教具の一つ、iPod の実践例を紹介したい。

■教具としての iPod

iPod は拡張性が高く、音声だけでなく画像や動画も一括管理しデータベース化することができる。また、関連のアクセサリを駆使することで様々な授業展開が可能となる。例えば、iPod に FM トランスミッターを接続し、生徒が持つ携帯ラジオに飛ばせばセンター試験さながらのリスニングテストを行うことができる。音楽の歌詞を消し、教室で歌を歌うこともできる。その他にも、テレビ番組を録画したものを、iPod 形式の動画 (mp4) にしておけば、学習した文法を実際にネイティブが使用している場面を生徒に見せることで文法に対する関心を高めることができる。文法をイメージで解説した番組なら、教師が長々と説明せずとも短時間で理解を深めることができ、直後に文法問題などに取り組みせれば、定着を促進することができる。また、教科書の題材に関する資料や写真をパワーポイントで作成し、JPEG 形式で保存する。これを活用して、英単語をフラッシュさせればフラッシュカードの代用ができ、カードを持ち運ばなくても簡単に単語の発音練習ができる。同様に、生徒の作品、教科書の題材に関する資料や写真を保存しておけば、モデルの提示、Oral Introduction および、Reproduction や Sight Translation に活用することができる。

□iPod の特徴

機能	授業での活用	データベース
音声	教科書(問題集) CD、授業用 BGM、チャンツ、英語の歌、カラオケ、基礎英語など	教科書 CD、歌、ラジオ 入試リスニング問題 *Podcast
動画 (ビデオ)	資料映像の提示、文法指導、モデルの提示、	資料映像 (YouTube)、 生徒の発表(スピーチ・プレゼン)
ビデオ撮影	スピーキングテストの録画 (iPod nano のみ)	生徒の発表(スピーチ・プレゼン)
画像 (写真)	Oral Introduction、sight translation、フラッシュカード、モデル(作品)の提示	資料画像(教科書題材)、 生徒の作品(修学旅行新聞など)

\*Podcast (ポッドキャスト)とは、インターネットを使って配信されているラジオ番組を、誰でも気軽に好きな時に、聴くことができる仕組みのことです。

□ iPod の活用法 (iPod + アクセサリ = 活動)

iPod は 2007 年に累計販売台数が 1 億台を超え、それに合わせて様々なアクセサリやソフトウェアが販売されるようになった。現在では、そのアクセサリと iPod を組み合わせて、様々な活動を授業で行うことができるようになった。



- +
- 専用スピーカー = ラジカセ / iPod のリモコン化 (w/ Bluetooth)
  - ポケカラ = カラオケ
  - FM トランスミッター + 携帯ラジオ = 仮想 LL 教室? (センター試験リスニングも可能)
  - Composite AV Cable = ビデオ、パワーポイント (プロジェクター、テレビと接続可能)
  - ??? = 可能性は無限大 (まだまだ進化中)

■ おわりに

誌面が限られているためここでは iPod の紹介だけに留まってしまったが、簡単・格安で入手でき、授業で活用できる教具はまだまだたくさんある。

「英語教師は配られたカードで勝負する」、冒頭でも述べたように、私たちは与えられた条件下で授業を行っていかなければならない。大切なことは持っていない道具を欲しがることではなく、諦めず、自分がやりたいことを入手できる範囲内の道具を使って工夫し達成しようとするのである。

最後に、授業の効果を高め生徒にやる気を起こさせるもの、それが教具や教材の役割である。指導目標や指導目的に合わせてそれを使うことにより、生徒の心と体を動かし、授業を画期的に変化させることができる。授業 (= 生徒の時間) には限りがある。その時間を大切に、より効果的な方法と手段を使って授業を進めていくことをこれからも心がけて行きたい。

XX

**次号予告**

支部だより (45号) の発行は2010年3月の予定です。

- 内 容**
- \* 英語教育への提言
  - \* 第123回研究大会報告
  - \* 実践報告
  - \* 研究・研修部会だより

**その他** 新しい企画やアイデアをお持ちの方は、支部だより担当まで情報をお寄せください。

XX

## 外国語(英語)活動における コミュニケーション能力育成のあり方

——— 公立小学校における英語指導日常化の実践紹介 ———

服部 孝彦 (大妻女子大学)

千葉県南房総市立南三原小学校と和田小学校は千葉県教育委員会及び南房総市教育委員会の研究指定をうけ、外国語(英語)活動に積極的に取り組み成果をあげている。筆者は運営指導委員としてほぼ毎月、南三原小学校及び和田小学校を訪問し、両小学校の外国語(英語)活動の取り組みに深くかかわらせていただいている。本稿では南三原小学校と和田小学校が英語指導日常化のために行っている実践を紹介する。

南三原小学校と和田小学校は千葉県最南端の南房総市にあり、地域人口は4,000人、第一次産業が中心で、少子高齢化が急速に進んでいる地域である。両小学校は同地域の和田中学校と協力して小中9ヵ年を見通した小中連携指導計画を作成し、実践検証をしている。1年生・2年生は英語活動として年間18時間(45分×18週)、3年生・4年生は総合的な学習の時間・国際理解活動として年間18時間(45分×18週)、5年生・6年生は英語活動として年間35時間(45分×35週)の時間数で実施している。さらに両小学校では、児童が英語に触れる機会を多くするために、英語を使った日常的な活動を積極的に行っている。以下、南三原小学校と和田小学校において朝の会、他教科の授業、給食の時間などに実際に行っている英語に触れる活動を具体的に紹介する。

### ・朝の読書、読み聞かせ

朝の読書の時間を利用してALTが児童の発達段階に合わせた本を、クラスごとに読み聞かせる。年間指導計画に合わせた内容の本や外国の文化や生活について紹介した本などを、説明を加えながら行う。

### ・朝の会

朝の会で、健康観察や日付、天気を英語で言う練習を行う。また年間指導計画に合わせて簡単なスピーチを行ったり英語の歌を歌ったりする。

### ・他教科の授業

例えば音楽では英語の歌を歌う、理科では昆虫の名前を英語で言う、算数では簡単なたし算やひき算、円・三角形などの形を英語で言う等の活動を授業に取り入れる。

### ・昼休み

昼の放送中に「英語のワンポイント・レッスン」というコーナーを設け、放送委員の児童とALTとの簡単な会話や英語クイズを行う。具体的には次のようなものである。

Student: I want to eat シュークリーム.

ALT : What? You can't eat that.

Student: Why?

ALT : シュークリーム is shoe cream.

Student: What's this?

ALT : Oh! That's a cream puff. シュークリーム is cream puff in English.

Student: Oh!!

南三原小学校と和田小学校は児童の発達段階を考慮した系統的なカリキュラムを作成し、それに基づく指導を行うことによりコミュニケーション能力の素地を養うことに成果を上げている。しかし、英語活動が成功しているもう一つの理由は、日常活動において英語活動の時間以外にも児童が英語に慣れ親しむことができる工夫を先生方がしているからである。筆者は両小学校を訪れるたびに先生方の努力に頭が下がる思いである。

## 小学校外国語活動 実践報告

岡澤 永一 (暁星小学校)

公立小学校での外国語活動完全実施が一年後に迫ってきました。すでに98%を超える小学校が何らかの形で外国語活動を行っており、独自の実践と研究を重ねています。また、外国語活動に関する研修会を開催する各自治体の教育委員会も、数年前に比べ格段に増えました。とくに最近では、今年度配布された英語ノート(文部科学省作成)についての研修会が多くを占めています。

英語ノートには、音声面でのサポートのために、音声CD-ROMと英語ノートデジタル版CD-ROMが添付されています。これは、他教科にはみられないことで、英語ノートが電子ボード(電子黒板:以下、電子ボードに統一)上での使用を想定し作成されていることを意味します。

このような状況の中、今年の夏、「小学校外国語活動における電子ボード活用について」という内容で、いくつかの自治体主催の研修会でお話しさせていただきました。会場は自主参加の先生がほとんどで、電子ボードを使った外国語活動への関心が高いことがわかりました。しかし同時に、外国語活動以外の教科でしか電子ボードを使用した経験がない、電子ボードの購入はしたが資料室の隅でほこりをかぶっているなど、多くの先生が外国語活動での具体的な有効利用ができていない、という印象を受けました。

われわれには、教材がアナログでもデジタルでも、「コミュニケーション能力の育成と言語文化の体験的理解」というねらいを念頭においた外国語活動が求められます。そのためには児童から目を離さず、彼らが何に興味をもち、どこまで理解しているのかを常に把握することが重要です。この“目の前の児童”が見えていないと、山のように出ている教材や教具、指導法に迷い、児童が置き去りにされる危険性があります。

電子ボードは絵や写真を大きく見せるだけではなく、軽くたたけば英語の音を出し、同時に映像も流せるなど、その機能は多岐にわたります。しかし、機械はあくまでも授業サポートの道具でしかなく、電子ボードが教師に替わって授業をすることはありえません。教師が活動の本来の目的と児童の学びの姿を意識しながらその機能を使うことで、はじめて有効な教具となりうるのです。

土台となる指導技術を高め、よりよい外国語活動を電子ボードの助けを借りて進めていきたい、研修に参加された先生方とともに、私自身も改めて勉強できた夏でした。

**e-Learning研究研修部会**

塩谷 幸子 (法政大学)

塩谷 幸子 (法政大学)

2009 年度第 1 回研究会を 2009 年 9 月 12 日に早稲田大学で行いました。今回は「ウェブとのハイブリッド化を果たした CALL システム」と題して、株式会社ラウンドの tRoute 6400EX という CALL システムについてのデモ紹介と意見交換を行いました。このシステムの特徴は、(1) アナログ転送システムによって安定した高品質の音声画像を提示できる (2) 各種データファイルをウェブシステムで扱うため、学生は教室外でも自学習として利用でき、また、教員は自宅で教材作成やデータ整理ができる、という点です。LL 機能や画面転送システム機能など従来の CALL システムの機能を備えつつも、軽量化、低コスト化を図ることが可能であるという説明を受けました。当日、電力不足でスピーカーとプロジェクターが使用できなかったことは残念でしたが、参加者と業者の間では自由闊達な意見交換が行われました。また、Audacity というフリーのソフトウェアを改変して装備したディクテーション機能には多くの参加者の注目が集まりました。

e ラーニングへの注目が高まっている今日、当部会は新しい情報や意見交換の場を提供し、ますます活発な活動を続けてゆきたいと考えています。第 2 回研究会は、e ラーニング教材の検討会を予定しています。また、今後取り上げて欲しいテーマなどございましたらお気軽にご意見をお寄せください。  
kantoel-owner@yahoogroups.jp

**教材教授法研究研修部会**

久保田 章 (筑波大学)

当部会では、本年度のテーマのひとつとして、「学習者の主体的意識を喚起するための学習指導環境作り」を掲げ、認知と情意という 2 つの面からアプローチを行っています。その活動の一環として、7 月 18 日に筑波大学の George Robert MacLean 先生を講師に招き、“Classroom Feedback Systems” という題目で、ワイヤレス型のフィードバックシステム「クリッカー」の利用に関する講演とワークショップを開催しました。（「クリッカー」は、レスポンスアナライザー機能を備えた小型の機器で、特に普通教室における学習者と指導者間の意思疎通を支援するシステムとして近年注目されています。）

講演では、学習内容理解度の即時確認や学習結果の集計のような効率的な授業運営のためのツールとしての側面よりは、むしろ、学習者を学習空間に巻き込んだり、他者との間で問題意識を共有するためのメディアとしての活用法などが取り上げられ、主体的な学習の涵養、学習者の協同学習意識の喚起という面での「クリッカー」の有用性が大きくクローズアップされました。

また、併行して、教材のタスクの分析と開発についての勉強会を筑波大学で実施しています。不定期開催ですが、ご興味がおありの方は下記までご連絡ください。 kubota@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

## 学習環境研究研修部会

石川 洋一 (日英会話学院)

語学教育の現場でLL 関係の機器をどのように使うか。そのシステムの限界をどのように見つけていくか、またどうすればうまく使えるのか。  
これらについてHP上でレポートを公開していくという形で活動しています。  
私の学校(日米会話学院)でAdiLL-1000(アンペール社)を導入したこともあり、このシステムをうまく使う方法について考える、という形になろうかと思えます。  
今年度は通訳の授業でAdiLL-1000をうまく使うには、と題してレポートを作成しようと考えています。あと少々時間がかかるとは思いますが、お待ち下さい。  
主に「Drill&Review」の機能をどのように使うか、という内容になる予定です。  
AdiLL-1000をお使いの方、また導入を検討している方々の参考になろうかと思えます。  
LET 関東支部のHP上にレポートを載せる予定です。ご覧になってください。

学習環境研究研修部会では、今後も実際の機器を提供していただいて操作に慣れる、機能を試してみるといった場を提供していきたいと考えています。私の学校でも随時見学を受け付けていますので、ご興味のある方はご連絡ください。

## 早期外国語教育研究研修部会

岡澤 永一 (暁星小学校)

平成23年度からの外国語活動完全実施を前にして、電子ボード(電子黒板:以下電子ボードで統一)を設置する小学校が増えてきています。このような現状をふまえ、本部会では今年度、公立小学校における電子ボードの効果的活用法に研究主題をおいて、デジタル教材や指導方法の開発・確立に取り組んできました。

この研究・実践報告の場として、2010年2月27日土曜日13:00~16:00(予定)に、暁星小学校で、小学校英語活動と電子ボードの役割について、研修研究会を設けます。最新情報は、LET 関東の部会ページをご参照ください。皆様のご参加をお待ちしています。

